

2014. 6. 26 (木)

## 教育現場における信頼と寛容な社会

稲 増 一 憲

### 若者の政治への関心

おはようございます。稲増です。打樋先生からご紹介をあずかりましたように、私は「世論」というものを研究しているわけですが、世論というのは何かというと、これは人々が持っている意見です。ただ意見とはいっても、例えば、巨人が良いとか阪神が良いとかそういうことではなく、時として政府に影響を与えるような政治的、あるいは社会的な問題に関する人々の意見です。消費税を上げるべきかどうかとか、集团的自衛権に賛成するべきかどうかと、そういったものが世論となります。

こういったテーマなので、ゼミでも政治の問題というのを時々扱うことがあります。ただ政治というのは、私も法学部の出身ではないですし、皆さんも社会学部の学生ということで、なかなか関心が持てるテーマではないので、身近なテーマということで、若年層、若者が政治に関心を持つにはどうすればいいか、そういうことをみんなで考えてみるということ、一定の頻度で取り上げています。

その際に、学生の皆さんから必ず出る意見として、「小さいころから関心が持てるように、中高時代から学校で政治の事を取り上げていくべきだ」と、こういうような意見があ

ります。確かにこれはもっともで、その通りだとも思うのですが、では、私たちが中高で政治について聞いていないかということ、おそらく公民とか現代社会の授業で三権分立とか、あるいは小選挙区制と比例代表制とか、あるいは日本国憲法の9条とか25条とか、平和主義とか生存権とかについて、恐らく聞いていると思います。したがって、政治について中高で教えていないわけではありません。しかし何か関心が持てないのです。何かかというほど不思議なことではないかもしれませんが、関心が持てません。

恐らくその原因の一つとして私が考えているのは、「学校が政治的に中立でなければいけない」と、よくいわれるこういう意見です。これを意識し過ぎるあまりに、実際にどういう人たちがどういう政治的な主張、考えを持っていて、それがどう主張されているのか、こういう意見があって、こういう意見があったと、そういうことが教育現場であまり扱われていないからではないかと考えています。

ただこれは難しいところであって、例えば、中高の先生が「こういう意見があります」と教えますと、当然、その意見と反対側の人たち、例えば、保護者の方が聞いて、「学校で、ああいうことを教えるのはけし

らん」というような声は必ず、抗議として出てくるということがあるわけです。

したがって、そういうことが起こってしまうので、だったら誰からも文句が出ないような事、三権分立がありますというようなことだけを教えよう。三権分立について教えてはいけないという人はいないと思いますので、安全な事、誰が聞いても大丈夫な事だけを教えようという話になるのかなというふうに思います。ただ、それで面白いかどうか、政治というものが分かるかどうかというと、これは疑問があるのではないかと思います。

#### 教育現場における政治的中立性と信頼

実は私の中高時代というのは、これとは全く対極でして、特に一人の先生がこれと全く対極にありまして、中学で出会った公民の先生というのは、バリバリの、誰がどう見ても明らかな共産主義者でした。教員の退任のあいさつといえば、「皆さんありがとうございました」とか、「この学校でこういう良い思い出がありました」という話をするのが普通だと思うのですが、その方はそういうことを一切言わずに、「今の日本は多国籍企業によって大変な事になっている、それをなんとかしなければならぬ」という話をされました。多国籍企業、マクドナルドとかユニクロとかもそうでしょうけれども、国境を越えるような企業の問題というところを糾弾し、そして去っていったのです。

この話を聞いた僕は、ある意味で感動しました。といっても、二十歳になって僕が投票しようといった時に共産党に入れようと思ったかということ、別にそうではありません。あるいは、次の日から「そうか、多国籍企業は

いけないのか、もうマクドナルドには行かないようにしよう」と思ったかということ、そういうことありません。別に先生が語られた事に全部賛成するわけではなく、この人はこういう立場だからこう言っているんだろうなというところもありました。そうではなくて、周りからどう思われても、自分の主張とか信念を貫くという、この姿勢はある意味で格好良いなと思ったのです。

普通、退任の挨拶でこんなことを言ったら変に思われるとか、人間は思いがちですけれども、それをやって去っていったというのは、格好良いと思いました。おそらく当時の男子高校生の言葉で言えば、「こいつガチだな」という、そういうようなことを感じました。

では、僕の学校の先生はみんな共産主義者かということ、そういうことではなく、実は別の日本史の先生なんかは、授業中に、「戦時中には戦争に反対した人の中でも、共産主義者とかいう頭のおかしい人たちもいるけど、そうじゃない人もいて」とか、そういうことを言うわけです。その先生は「共産主義者は頭がおかしい」とか言うので、当然、公民の先生とは仲良くはできませんし、社会科準備室はイデオロギー対立で殺伐としていたという、口もきかないような状況だったという噂を聞いています。

ただそれを聞いて、僕はこのことも格好良いなと思ったんです。どういうことかといいますと、その公民の先生も日本史の先生も格好良いし、何よりそういう一種の尖がった先生たちを一堂に集めてしまう、私の中高、母校は格好良いなと思ったんです。尖がった先生を集める、しかも同じような考え方ではなくて、いろんな考えを持った先生、そういう

先生たちを集めている学校ってすごいなと思いました。

これっていうのは、恐らく生徒を信じていなかったらできないですね。「生徒は受動的、まだ幼い馬鹿だから、偏った教育をされたら洗脳されてしまう、危ない」みたいな、そんな考えを学校の先生たちが持っていたら、とてもじゃないけれども、これまでに話したような先生は雇えないということです。

これは後で思ったことですが、「うちの生徒たちはいろんな考え、いろんな尖った考えとか偏った考えも含めて聞いたとしても、それをうのみにするのではなく、きちんとそれらを見極め、その中で受け入れられるものを受け入れて、自分なりの考えというものを作っていく力を持っている」というふうに、そう信じてくれていたんだと思います。だからこそ、僕にとっては、それを格好良いなと思えましたし、母校のことをますます好きになることができました。

## 異なる意見に寛容な社会を求めて

たぶん、人間誰も自分と異なる考えの人というのは怖いし、そういう考えが世の中の多数派になってくるとことは怖いし、だからそれにだまされてしまう人がいると思えば、どうしても黙らせてしまいたい、その人に発言をさせないようにしたい、そういうふうに思ってしまうのだと思います。僕の研究のもうひとつの対象メディアですが、実際に、現在の日本でも残念ながら、ツイッター上なんかで自分と異なる意見の人を見つけるとはその人に大量に抗議をして炎上させたり、あるいは授業でこんなことを言った先生がいるとって学校に電話をかけて謝罪をさ

せて、みたいなことで黙らせてしまおうという、そういうような風潮、動きというのは起こってしまっています。

ただ少なくとも、これは僕の中高時代の経験からもそうですし、これまで生徒とか学生という立場で学校に所属したり、あるいは教員という立場で学生たちの前に立つという経験をしてきて思うことですけれども、生徒や学生、若者だけでなく、年を取った人でももちろんそうですけれども、みんなそんなに何でもかんでもうのみにしてしまうほど馬鹿ではないですし、頭が悪くはないし、他者の言ったことをきっちり見極める力も持っていると思います。思っているといいますが、信じているに近いと思うのですが、そうだと思います。だからこそ、いろいろな考えを持った人がいるとしても、そういう人たちがなるべくいろんな所で自由に意見を言えるような社会であってほしいと思います。

民主主義を語る上で有名な言葉として、「私はあなたの言うことには賛成はできないが、あなたがそれを主張する権利を私は命がけで守る」というものがあります。民主主義においては、賛成できない意見であっても、それを言う権利は守らなければいけません。これは重要な事だと思います。

もちろん関学の学生たちも、いろんなことを話したとしても、それをちゃんと自分で考えて受け入れることができる人たちだというふうに思っていますので、この人とこの人は絶対合わないという人であっても、その両方が授業で話しをできるような自由というのは守られるべきだと思います。学生たちはそれを見極めて、こういう考えもこういう考えも、いろいろな考えがあるんだということを受け入れて、豊かに考え、自分自身の考えと

いうものを作っていってもらえればうれしいと考えています。そういう意味で、先ほど、打樋先生に読んでいただいた言葉の中にあっ  
た「寛容」という、違う立場の人を認めること、そして自由に意見を言うこと、これがぜひ関学でもそうですし、他の大学でもそうで

すし、日本全体あるいは世界においてもそうですけれども、守られてほしいなと強く思っています。

そういうところで話を終えたいと思います。ありがとうございます。

(社会学部准教授)